

安田義継さんは、八郎潟調整池にほど近い潟上市天王の羽立地区で「ひとめぼれ」を栽培している。湖と日本海に挟まれた同地区の砂地の圃場に、以前から土壌改良材を散布するなど、「美味しい米」コンクールの応募条件を満たす栽培方法を行っていた。同コンクールのことを聞いた安田さんは、令和3年度にはじめて応募したところ、見事に敢闘賞を受賞。翌年の令和4年度には最優秀賞を獲得し、挑戦から2年目で快挙を成し遂げた。

地域コミュニケーションが こまめな栽培管理に一役

自分で主導して米づくりを始めたのは、およそ10年前から。当初から地域の先輩農家の水田に行き、農作業する姿を実際に見聞きすることで多くのことを学んできた。現在でも、周囲の先輩から都度アドバイスをもらうことが多い。「近くの先輩農家と圃場で会うと、農作業のことや田んぼの様子、除草剤の効きや新しい機械の情報なども頻繁に話します。コミュニケーションが多い地域だと思います」という。

早朝や夜間の出勤が多い仕事と兼業する安田さん。週末の農作業の負担を減らすため、平日の仕事の前後に少しでも圃場

に向かい、気になることがあったときは営農指導員に連絡して確認してもらう。地域内の農家との交流や自身の農作業への態勢も起因して、こまめに稲の生育に向き合う姿勢ができています。

細心の注意で今年産も全量1等

今年の夏は過去に見ない酷暑で、多くの生産者を悩ませた。安田さんも細心の注意を払い、日々の水管理を実施。水自体が普段より熱くなっていることや稲の伸長の程度などを念頭に置き、インターネットで天気の詳細予報を参考にしながら生育状況を判断した。稲刈りは例年より1週間早くスタートし、機械類などのトラブルもなく無事に終えた。

「今年は土壌改良材が『シリカ未来II』から『シリカ未来』に変わり、散布量も減ったため効果がどう出るか心配しましたが、収量は昨年とほぼ同じでした」と安田さんは振り返る。今年の気象経過の影響は、先に「あきたこまち」を収穫した人の話や報道などを聞き、安田さんも自身の「ひとめぼれ」の品質低下を覚悟していたが、懸念していたほどの甚大な影響はなく検査結果も全量1等となった。

いつも通りを重ねて今後も上位を

最優秀賞に輝いた令和4年産米については「普段と変わらない、いつも通りの栽培をしただけでした。最優秀賞の連絡をもらってびっくりしました」と話す。「いつも通りの栽培管理に手を抜かない安田さんは「これから上位を目指して、普段の農作業に励みたいと思います」と笑った。

安田さんは兼業で水稲を栽培していますが、仕事の行き帰りなどに圃場を巡回し、気になることがあれば、すぐに営農指導員へ連絡をくれます。こまめな圃場の観察と熱心に栽培管理に取り組む姿勢が、受賞に繋がったと感じます。



男鹿地区営農センター
加藤 勇輝

